

## 第三者意見

本報告書は、当社にとって9回目の発行となります。報告内容や活動の継続的な改善につなげるため、2005年度から、外部有識者の意見をいただいています。



一橋大学大学院商学研究科教授  
商学博士

伊藤 邦雄

京王の電車・路線バス事業は今年で100周年を迎えるという。「会社の寿命30年説」というのがある。会社は激しい競争にさらされ、平均的に30年ぐらいで淘汰されてしまうということを指す。もちろん社会のインフラ事業が30年で途絶えてしまっては困るが、それにしても100年持続してきたということは並大抵のことではない。

100年の持続を可能にした要因には、「先駆」と「深化」があると思う。それは京王電鉄事業の歴史に脈打っている。今では当たり前になった電車内での冷房だが、1968年に京王電鉄が関東圏で初めて通勤電車に冷房を導入した。事業を通じた先駆的なCSR活動と言える。また、エネルギー効率のよいVVVFインバータ制御装置を1991年度から順次導入し、2012年10月に大手民鉄16社で初めて搭載率100%を達成した。これにより運転原単位は、回生ブレーキを含めた装置導入前と比較して45%削減した。従来からの活動のまさに「深化」といえる。

安全面での取り組みにも、様々な深化が見られる。調布駅付近連続立体交差事業での地下線への切り替えがさらに進行し、2012年8月に完了、踏切18カ所が廃止された。今後は笹塚以西への鉄道立体化が引き続き推進される。さらに、2013年3月、井の頭線でのATC導入により、全線にわたり信号システムのATC化が完了した。このことは利用者にとっての「安心」につながる。鉄道事業は「安全」のみならず、「安心」を提供することが肝要である。

環境面では、先の鉄道車両のVVVFインバータに加え、鉄道施設の省エネルギー化も評価できる。その代表的な1つが、6月に開設した高幡不動駅の鉄道現業事務所である。同所は壁面緑化や太陽光発電システムなど13種類もの設備を採用

し、従来に比べ約30%の省電力と節水に取り組んでいる。また生物多様性への取り組みにも光るものがある。例えば、高尾山での社員参加の植樹活動、森の大切さを学ぶスクールを継続的に実施している。多摩川の清掃活動はさらに盛り上がりを見せている。お客様と社員合わせて700名余りが参加し、清掃のほか稚鮎の放流も行い、多摩川の鮎推定遡上数が大きく増加しているという。

社会的活動も広がりや深化を見せている。特に少子高齢化への取り組みは注目できる。例えば、「京王ほっとネットワーク」が提供している「商品当日宅配サービス」の対象エリアをさらに拡大している。翌日配送は一般的サービスとして全国的に提供されているが、当日配送は一段高いサービスである。また年内には多摩ニュータウンエリアで食品等の移動販売を開始する。同エリアは高齢化が進み、また急こう配の坂道が多い。移動販売はまさにそうした地域特性の問題や社会的課題を解決する取り組みでもある。子育て支援事業である「京王キッズプラッツ」も拡充されている。駅から近くの至便なところに保育所があるということが、いかに若い母親に助かるかは説明を要しない。

「シナジー(相乗効果)」という言葉がある。「1+1=2」ではなく、「1+1=3」という結合効果のことを言う。この言葉が使われている頻度の高さととは裏腹に、現実にはあまり実現されていない。京王電鉄のCSR活動には様々な面でシナジー効果が発揮されている。鉄道事業は多くの利用者とステークホルダーとの関係を生む。利用者への安全・安心な交通サービスだけではなく、鉄道沿線の住民の生活上の困り事を解決したり、また沿線住民の社会活動への参加を促し、近隣の自然を回復させたりすることで、「沿線価値」が上昇する。沿線価値の上昇は利用者や沿線住民の満足度を高め、沿線地域への移住希望者を増やす。そして、それは更なる沿線価値を生む。こうした持続可能なコミュニティの形成がCSRの神髄である。京王電鉄の活動がこうした持続的発展の好例として磨かれていくことを期待する。

一方で、100周年は次の100年への旅の始まりでもある。既に策定した中期目標をきちんとPDCAを回すことで必達するよう心掛けて欲しい。とともに、次の長期計画を策定し、社員、利用者、沿線住民と一体となってそれを実現することを願いたい。先駆が深化を生み、深化が次の先駆を生む。